

ボードレールの散文詩

『貧者の玩具』について

吉 田 典 子

I

ボードレールの詩作品の中に、猫はしばしば姿を見せるが、ねずみはわずかに1回しか登場しない。それは、散文詩『貧者の玩具』においてである。しかしこの1回限りの登場の際に、ねずみは重要な役を割り当てられている。すなわちそれは、貧しい家庭の両親が生活の中から見つけ出して子供に与えた、生きたおもちゃなのであった。

子供と玩具のテーマを、ボードレールはすでに1853年の自伝的傾向をもつエッセイ、『玩具のモラル』の中で展開していた。後に詳しく述べるように、この論考の一部を下敷として、そこに多少手を加えて誕生したのが、散文詩作品『貧者の玩具』に他ならない。まず、先行するエッセイに現われたボードレールのおもちゃの美学とでも呼ぶべきものを、他の作品と関連させながらまとめておこう。

「そもそも私は、あの独特の人形作りの方法について、変わらぬ愛着ともっともな賛嘆の気持とを抱きつづけてきた。それは、つやつやとした清潔さ、目もくらむような色彩の輝き、身振りの激しさ、形の明快さなどによって、美についての幼年期の観念を非常によく表わしているものである。」⁽¹⁾ こうした考えは、素朴さ *naïveté*、あるいは野蛮さ *barbarie* の美学として、ボードレールの美術批評におけるひとつの根本的な主張に相通ずるものがある。批評家としてのデビュー作、『1845年のサロン』の中で、誰からも相手にされなかったオスーリエの絵にあえてあれほどの好意と共感を示したのは、そのけばけばしいまでの色彩の故であった。⁽²⁾ 「美とは常に奇妙なもの」⁽³⁾ である。人形のもつ反日常的な清潔感、人工的な動き、常軌を超えた単純性が、本能に忠実な純真な眼にはかえって新鮮な驚きと喜びをもたらすように、節度を知らない色彩の冒険が、未知の美を開示することもあったのだ。

「大きな玩具屋の中には […] 小型になった人生がそっくり見出されはしないだろうか。それも現実の人生よりはるかに色彩に富み、はるかに清潔にされ、はるかにつやつやと輝いてはいないだろうか。」⁽⁴⁾ 玩具は、自然の世界と対立する人工の世界、ボードレールのいわゆる「人工天国」の産物である。しかしここにボードレールの玩具観を集約してしまうことは、きわめて危険である。それはごく一面にすぎない。エッセイは、玩具そのものへの審美的な関心から、遊びの道具としての玩具についての考察へと移行する。

ボードレールの散文詩『貧者の玩具』について

彼は、遊戯における子供たちの卓抜した想像力に注意を喚起する。駅馬車ごっこでは、椅子が一瞬のうちに、馬車にも、馬にも、旅客にも変身する。戦争遊びでは、兵隊になるのはコルク栓でもドミノでも何でもよい。板切れや本が立派な城塞を築き上げる一方、弾丸はビー玉で代用される。そして子供は、あるときは自由に空間を駆けめぐり、あるときは敵と味方の軍隊をひとりきりで指揮したりするのである。「玩具は子供にとって、芸術への最初の手ほどきであり、あるいはむしろ、芸術の最初の実現ですらある⁽⁵⁾」と詩人は断言する。このような子供の世界の中では、玩具は複雑である必要はない。いや、単純であればあるほどそれは広大な想像力に応え、変身の魔力も増大するのである。ボードレールは「野蛮な玩具、原始的な玩具」、「一文で買える玩具」、換言すれば「貧者の玩具」を称揚する。「生きた玩具」のエピソードが語られるのは、この個所においてである。さらに彼は「科学玩具」についても言及する。高価という難点はあるけれども、それは「子供の頭に不思議さや意外さの効果に対する嗜好を発達させること」ができる。

エッセイの最後の観察は、玩具をひねりまわしてついには壊してしまう子供の習性についてである。これをボードレールは、玩具の魂を見たいという最初の形而上学的傾向である、と解釈する。しかし、手にとるや否やたちまち玩具を破壊する子供についてはどうなのか。エッセイは、《Puzzling question!》という言葉で閉じられている。

遊びや玩具のテーマは、ボードレールにおいて、創造行為あるいは芸術とかなり緊密に結びついている。子供と芸術創造との関連ですぐに想起されるのは、『現代生活の画家』の中の有名な一句、「天才とは、意のままにとりもどされる幼年期に他ならない（傍点ボードレール⁽⁶⁾）」という言葉である。子供は、一見どれほど些細なものにも激しい興味を抱く。彼はすべてを新奇な対象としてとらえ、常に陶醉状態を保っている。その旺盛な好奇心と鋭い感受性は、ボードレールがコンスタンタン・ギースに託して表現した近代の芸術家の重要な特性であった。散文詩『英雄的な最期』の主人公である天才的な道化に、詩人がイタリア語の fanciullo（子供）に由来する Fancioulle の名を与えたのも、意味のないことではない。

II

この小論においては、散文詩『貧者の玩具』のテキストを分析しつつ読み直してみたいと思う。1862年9月24日、「ラ・プレス」紙に発表されたこの作品は、前述のように『玩具のモラル』という、いわばプレ・オリジナルをもっている。

韻文詩とほぼ同じ主題を扱っている散文詩は少なくない。これら対をなす作品 doublets においては、二、三の例外を除いて、すべて韻文の方が散文に先行していることが確認されている。ところが、純粋な散文から散文詩へのアプローチの例として、『貧者の玩具』はおそらく唯一の試みである。散文詩という、それ自体逆説的で定義のむずかしいジャン

ボードレールの散文詩『貧者の玩具』について

ルを、ボードレールがどのように考えていたかを知る上で、韻文詩から散文詩への書き替え作業は、多くの研究者が一致して重視するものであるけれども、散文から散文詩への変容という変則的なプロセスもまた、別の面からの光を与えてくれるものではないか。

ところでこの作品は、はっきりと2つの部分に分かれている。「無邪気な気晴らしをひとつ教えてあげよう。世の中には罪のない慰みというものがあまりに少なすぎる」という書き出しで始まる前半部（第1, 第2パラグラフ）において、話者は読者に安っぽいおもちゃをポケットに詰めて散歩に行くことを勧める。見知らぬ、貧しい子供たちに進呈するためである。後半部（第3～第8パラグラフ）は、そのような散歩の途中で見かけたひとつの情景として設定されているようだ。それは前半部とは特に論理的な脈絡をもたないひとつの物語である。前半部が貧者の玩具についての一般的な記述であるとすれば、後半部はその特殊な一形態、すなわち生きた玩具についてのおそらくは想像された逸話である。^{アネクドット}

このような内容的相違は、形式的な面ではっきりと裏付けることができる。前半部では *je* と *vous*, すなわち話し手と聞き手、あるいは発信者 *destinateur* と受信者 *destinataire* の関係が中心となっているのに対し、後半で使われている人称は、3人称のみである。また前半が現在と未来を主要時制としているのに比べて、後半は半過去が基調となっている。バンヴニストの提唱した区分にしたがって言えば、前者は《discours》であり、後者はほとんど《histoire》であると考えられるだろう。⁽⁷⁾

ところで散文詩が下敷としているのは、正確に言えば、『玩具のモラル』の第11段落の一部、及び第12・13段落全体である。散文詩の前半部は、エッセイの第12段落とそこに挿入的に用いられた第11段落の一部分に対応し、また後半部は、その第13段落に依拠している。前半部でボードレールは、エッセイに、先に引用したイントロダクションをつけ加えて、一個の作品としての独立性を与えた他は、特に目立った変更は加えていない。この論においては、テキスト分析の対象を一応作品の後半部、すなわち物語の部分に限りたいと思う。しかしその理解に役立つと考えられる場合には、前半部にも言及したい。

III

以下に掲げるテキストは、左側が『玩具のモラル』の第13段落であり、右側が『貧者の玩具』の後半部である。イタリック体で示した個所は、2つのテキストの間に表現の相違が認められる部分であり、また下線を引いた個所は、どちらか一方にしか存在しない語句、あるいは文章である。すなわちエッセイに下線を引いた部分は、散文詩にする際に削除された部分であり、また散文詩の下線部は加筆ということになる。これらのヴァリエーションには、対応個所に便宜上、それぞれ *a* から *s* までの記号をつけることにする。

A propos du joujou du pauvre, j'ai vu
quelque chose de plus simple encore,
mais de plus triste que le joujou à un
sou, — c'est le joujou vivant.^{a)} Sur
une route, derrière la grille d'un beau^{b)}
jardin, au bout duquel apparaissait^{c)}
un joli château^{d)}, se tenait un enfant
beau et frais, habillé de ces vêtements^{e)}
de campagne pleins de coquetterie.
Le luxe, l'insouciance et le spectacle
habituel de la richesse rendent ces
enfants-là si jolis qu' on ne les
croirait pas faits de la même pâte^{f)} que
les enfants de la médiocrité ou de la
pauvreté. A côté de lui gisait sur
l'herbe un joujou splendide aussi frais
que son maître, verni, doré, avec une
belle robe^{g)}, et couvert de plumets et de
verroterie^{h)}. Mais l'enfant ne s'occupait
pas de son joujou, et voici ce qu'il
regardait: de l'autre côté de la grille,
sur la route, entre les chardons et
les orties, il y avait un autre enfant,^{j)}
sale, assez chétif, un de ces marmots^{k)}
sur lesquels la morve se fraye lentement^{l)}
un chemin dans la crasse et la poussière.^{m)}
A travers ces barreaux de ferⁿ⁾
symboliques, l'enfant pauvre montrait^{o)}
à l'enfant riche son joujou, que celui-ci
examinait avidement comme un objet
rare et inconnu. Or ce joujou que le
petit souillon agaçait, agitait et
secouait dans une boîte grillée, était^{q)}
un rat vivant! Les parents, par
économie, avaient tiré le joujou de la
vie elle-même.^{r)}
Et les deux enfants se riaient l'un à
l'autre fraternellement, avec des dents^{s)}
d'une égale blancheur.

^{a)} Sur une route, derrière la grille d'un
^{b)} vaste jardin, au bout duquel apparaissait
la blancheur d'un joli château frappé par
le soleil, se tenait un enfant beau et frais,
habillé de ces vêtements de campagne si
pleins de coquetterie.^{e)}

Le luxe, l'insouciance et le spectacle
habituel de la richesse rendent ces enfants-
là si jolis, qu'on les croirait faits d'une
autre pâte que les enfants de la médiocrité
ou de la pauvreté.

A côté de lui, gisait sur l'herbe un joujou
splendide, aussi frais que son maître,
verni, doré, vêtu d'une robe pourpre, et
couvert de plumets et de verroteries.^{h)} Mais
l'enfant ne s'occupait pas de son joujou
préférⁱ⁾, et voici ce qu'il regardait:

De l'autre côté de la grille, sur la route,
entre les chardons et les orties, il y avait
un autre enfant, sale, chétif, fuligineux,^{k)}
un de ces marmots-parias dont un oeil
impartial découvrirait la beauté, si, comme
l'oeil du connaisseur devine une peinture idéale
sous un vernis de carrossier, il le nettoyait
de la répugnante patine de la misère.^{m)}

A travers ces barreaux symboliques
séparant deux mondes, la grande route et
le château, l'enfant pauvre montrait à
l'enfant riche son propre joujou, que celui-
ci examinait avidement comme un objet
rare et inconnu. Or, ce joujou, que le petit
souillon agaçait, agitait et secouait dans
une boîte grillée, c' était un rat vivant!
Les parents, par économie sans doute,^{r)}
avaient tiré le joujou de la vie elle-même.

Et les deux enfants se riaient l'un à
l'autre fraternellement, avec des dents^{s)}
d'une égale blancheur.

ボードレールの散文詩『貧者の玩具』について

まず目につく違いは、エッセイがただひとつの段落にまとめられているのに対して、散文詩はそれを6個もの段落に分けている点である。段落分けという手段について、ボードレールはかなり心を配っていたように思われる。彼がはじめて発表した散文詩、『夕暮』と『孤独』は、決定稿以前の段階では2つとも、ほぼ均等の長さをもつ4つの段落で構成されていたし、韻文詩『髪』と対をなす『髪の中の半球』は、韻文の7つのストロフとほぼ対応するような、7つの段落に分割されている。こうした初期の散文詩において、ひとつの段落は、韻文のストロフに相当するような、暗示力に満ちた視覚的休止の役割を担っていたと考えられるのである。

また、ここでは煩雑さを避けるために、異文として呈示しなかったが、散文詩の方にはエッセイより、ずっと多くの読点が設けられている。それは、段落分けと同じように、一種の休止であり、そのために個々の記述の輪郭は、より明瞭に浮かびあがってくると言える。

次に、重要な削除と追加について、簡単に触れておきたい。散文詩を作るにあたってボードレールは、エッセイの最初の一文(a)を削り、また最後に結論部分(s)を新たに付け加えている。この加筆については後述することにして、削除された部分について考えてみよう。すでに指摘したように、『貧者の玩具』の前半と後半の間には、時間的、論理的なつながりが希薄であり、《discours》から《histoire》への推移は全く唐突であると言ってよい。しかしエッセイの方では事情は異なっている。「貧者の玩具と言え、私は一文で買える玩具よりももっと簡単で、しかしもっと悲しいものを見たことがある、——それは生きている玩具である」という記述は、以下に続く情景を、話者の「見たもの」として、明確に規定している。こうした説明的部分の省略は、散文詩の「詩性」を増大するものであろう。また内容から言えば、エッセイは生きた玩具を安物の玩具より「さらに悲しいもの」と見なしている。ここではねずみは、散文詩におけるような積極的かつ象徴的な価値を、まだ与えられていないのである。

IV

ある決まった長さをもつテキストを読む行為は、1篇のフィルムを観る行為にたとえることができる。そこでは、1枚の絵画のように、同時に全体が呈示されているわけではない。フィルムがいくつかのシークエンス séquence の連続であるように、物語もまた、時間や空間や主体を異にするいくつかの部分から成り立っているのであり、そのひと続きの部分、映画にならって、ひとつのシークエンスと呼ぶことができる。

『貧者の玩具』後半部の物語は、どのようなシークエンスに分割できるだろうか。半過去を主要時制とするこのテキストにおいて、時間の推移は全くない。それは、ひとつの持

続する状態としてとらえられた一個の情景の描写である。それでは空間についてはどうか。時間を表わす指標が全く見られないのに対して、空間の表示は3回にわたって行なわれている。

I : Sur une route, derrière la grille d'un vaste jardin, [...]

II : De l'autre côté de la grille, sur la route, [...]

III : A travers ces barreaux symboliques séparant deux mondes, la grande route et le château, [...]

このテキストにおいては、空間が規定されると同時に、登場人物も規定される。Iの空間における主体は金持の子供、IIの主体は貧者の子供であり、IIIでは両者が一緒に登場する。

以上のことから、問題のテキストは、異なる空間の指標を冒頭にもつ3つのシークエンスに分割することができる。これらをSQ I, SQ II, SQ IIIと名づけておこう。

空間と主体の変化を一瞥しただけで、この3つのシークエンスは、いわば正反合の関係にあることが明らかである。では各シークエンスをさらに細かく分節しつつ検討していくことによって、SQ I と SQ II が意味論的にどのような対立関係をもっているか、そしてそれらがSQ IIIにおいていかに総合されているかを調べていきたいと思う。

V

SQ I の記述を順を追ってたどっていくと、まず最初のパラグラフに、空間の描写(A)と子供の描写(B)があり、続いて現在時制を用いた子供についての註釈部分(C)がくる。そして3つ目のパラグラフに子供の玩具の描写がある。SQ II の方は、最後の玩具の部分欠いてはいるが、AからCまでの部分については、SQ I と互いに対応する記述が認められる。したがってここではまず、SQ I の前半部とSQ II とを対比させてみたい。

	SQ I (前半)	SQ II
A	Sur une route, derrière la grille d'un vaste jardin, au bout duquel apparaissait la blancheur d'un joli château frappé par le soleil,	De l'autre côté de la grille, sur la route, entre les chardons et les orties,
B	se tenait un enfant beau et frais, habillé de ces vêtements de campagne si pleins de coquetterie.	il y avait un autre enfant, sale, chétif, fuligineux,

C	<p>Le luxe, l'insouciance et le spectacle habituel de la richesse, rendent ces enfants-là si jolis, qu'on les croirait faits d'une autre pâte que les enfants de la médiocrité ou de la pauvreté.</p>	<p>un de ces marmots-parias dont un œil impartial découvrirait la beauté, si, comme l'œil du connaisseur devine une peinture idéale sous un vernis de carrossier, il le nettoyait de la répugnante patine de la misère.</p>
---	---	---

空間の描写

(1) 柵

まず最初に、「鉄柵の後ろ側」と「鉄柵の反対側」が空間的に対峙している。柵の背後とは、柵によって囲まれた場所、すなわち閉じられた空間である。それに対して柵の反対側は、柵の内部をとり囲む空間、周辺へと無限に広がっていく空間を暗示している。ところで、《être derrière les grilles（柵の後ろにいる）》という言い回しは、比喩的に《être prisonnier（収監されている）》の意味に使われる。SQ I の空間にいる人間が囚われの身であるのに対し、SQ II は自由な空間を示しているということもできよう。

(2) 庭園とあざみといらくさ

SQ I の「広大な庭園」に比較されうる記述は、SQ II の「あざみといらくさの間」に見出すことができる。いずれも植物に関係する言葉である。まず《jardin》は、『プチ・ロベール仏々辞典』では、次のような定義がなされている。

jardin: terrain généralement clos, où l'on cultive des végétaux utiles ou d'agrément

この語もまた「閉じられた空間」を示している。庭園の植物は、人によって栽培されるものであるからもちろん人工的であり、またそれは有用かつ人間の眼を楽しませてくれるものである。

次に同じ辞書から《chardon》と《ortie》の説明を引用してみよう。

chardon: plante à feuilles et bractées épineuses

ortie: plante dont les feuilles sont couvertes de poils fins qui renferment un liquide irritant

あざみといらくさに共通する点は、それらがとげや、あるいは葉から分泌される液体によって、人を傷つける有害な植物であることだ。『19世紀ラールス辞典』は、あざみについて次のように書いている。「一般的に言って、あざみは、土壌の不毛なことを示す指標としていわば象徴 *emblème* と考えられている。それは「雑草」と呼びならわしているものの代表格である。」いらくさについては、同辞書の掲げるユゴーの詩句、《J'aime l'araignée et j'aime l'ortie/parce qu' on les hait》を見れば、この語のコンテクション

は明らかであろう。この2つの植物は、辞書の例文などによると、しばしば一緒に用いられるようである。これらは、いわゆる雑草である点で、庭園の栽培植物と対立する。またその旺盛な繁殖力は、庭園のような閉塞した空間ではなく、柵の外側と同様に広大無辺な空間を示唆している。

さらに、《jardin》と《chardon》の比喩的な意味を指摘しておくのも、無意味とは思われない。前者は、「豊かで肥沃な地方」⁽⁸⁾や「人が幸福に生きる美しい場所」⁽⁹⁾などを示すのに対し、後者は「困難、障害」⁽¹⁰⁾や「窮境」を表わすのである。

(3) 城館と街道

柵に囲まれた庭園の奥に見える「陽に照らされた美しい城館の白い姿」が、金持の子供の領域を象徴しているのに対し、貧者の子供の領域は路上そのものである。道路もまた開いた空間であるのに対し、城は、その本来の性格からして、閉じられた空間、外からの攻撃に対して身を守るための場所である。

この個所では、エッセイで単に《un joli château》であったものが、散文詩では《la blancheur d'un joli château frappé par le soleil》という表現に書き改められている（ヴァリエント *c*, *d*）。ここでは城館は、まずその「白さ」として視覚に訴える。また、「陽に照らされた」という形容部分は、比喩的に解釈することも可能だろう。《une place au soleil》（陽のあたる場所）とは、特権的な地位や状態を示す表現だからである。

子供の描写

以上に見てきた2つの空間の描写は、さまざまな対立する要素を含んでおり、富者の世界と貧者の世界は、風景に託して象徴的に表現されている。次に、それぞれの空間に固有のものとして、2人の子供が登場する。ひとは「美しくはつらつとして、粋な感じにあふれた散歩服を着た」少年であり、もうひとは「汚なく虚弱で、煤色をした」子供である。

ここで注意しておきたいことは、最初の子供に服装の記述があるのに対し、2番目の子供にはそれがないことである。衣服とは人間の身体をおおうものであり、それを保護し、また飾る役目をもっている。しかもこの子供の服装はきわめて人工的である。

ところでエッセイの方では、2番目の子供に「煤色をした」fuligineux という形容詞はつけられていなかった（ヴァリエント *h*）。この形容詞は、ラテン語で「煤」を意味するfuligoに由来するが、表面に付着する点では衣服と同じ機能を果たしている。同時にこの語は、城館の白さに対して、黒のイメージを浮かびあがらせる役目ももっている。

極端に単純化された子供の2つの肖像描写^{ポルトレ}が、並行しながら対立関係にあることは明瞭である。しかしここまでは、外部からの観察に属する部分であり、続く註釈部分に至って

はじめて、その本質が問題となる。

註釈

SQ I：「贅沢と気楽さと日々に見慣れた富貴とが、こうした子供たちをととてもかわいらしくしているので、並の階級や貧しい階級の子供たちとは違った捏粉で作られているのではないかと思われるほどである。」

SQ II：「鑑定家の眼が馬車造りの職人が塗りたくったニスの下からでも理想の絵画を見抜くのと同じように、もしも公正な眼が忌わしい悲惨の錆を拭き去りさえすれば、きっと美を発見するにちがいないあの賤民パリアの小僧っ子たちのひとり[...]」

SQ I では、金持の子供が、中流あるいは貧民の子供と比較される。このように漸次下がってきた階級は、SQ II でその最下点に達する。すなわちカースト外の賤民 *parias* の子供である。仲介物を経ることによって、2人の子供の対比は、最大限に強められている。この *parias* という語が、散文詩の加筆部分である事実（ヴァリエント *l*）は、貴賤の対比の強調が意識的であることを示すと同時に、詩人が社会の周縁の人々（屑屋、娼婦、道化師、乞食など）に抱き続けた強い関心と愛情を表わしている。『赤裸の心』の中には、「賤民パリアの真の偉大さについて⁽ⁱⁱ⁾」という一文があることを想起したい。また金持の子供が *enfant* と書かれているだけなのに、貧民の子供には *marmot* という俗語が使用される。ここには何ら軽蔑的なニュアンスはなく、むしろある種の親しみの感情があらわれてはいないだろうか。

ところで、SQ I の註釈部における判断の主体は、不特定の人間 (*on*) だが、SQ II では「公正な眼」、すなわち特権的な精神をそなえた人間である。前者がともなう動詞は *croirait*、後者は *découvrirait* となっているが、同じ条件法におかれたこの2つの動詞の本質的な意味の違いが、それぞれの判断の浅薄さと真正さを立証している。

これらの註釈部分で問題となっているのは、外観と中身の関係である。SQ I では、それ自体では何の積極的価値評価をもたない「捏粉」*pâte* が、中身を表わす暗喩になっている。一方、SQ II の直喩表現では、「ニス」と「錆」が表面を、「理想の絵画」と「美」が本質を、それぞれ表わしている。貧しい子供に「美」を見出すことによって、その子供は富者の子供に遜色のない存在として位置づけられるばかりか、「理想の絵画」にふさわしい、最高の価値を付与されているのである。

ボードレールは、エッセイを散文詩にするにあたって、この SQ II (C) の部分を全面的に書き改めている。エッセイではこの箇所は、「垢と埃の中を鼻汁が一筋ゆっくりと垂れ落ちていくあの小僧っ子たちのひとり」（ヴァリエント *m*）とされていた。これは貧しい子供の、きわめて写実的な描写である。1853年のエッセイには、当時クールベやシャンプルーリィとも親交の厚かったボードレールの写実主義的傾向が顕著に見られる。それに対

ボードレールの散文詩『貧者の玩具』について

し、散文詩において詩人は、この部分を金持の子供についての註釈部分と関連させることによって、作品の統一性を強めると共に、大胆きわまる価値の転倒を図っているのである。

VI

さて、SQ I の後半部は、金持の子供の玩具についての記述である。SQ I とSQ II は同一の構造にしたがって進行しているが、SQ II には貧乏人の玩具に関する部分が欠落している。それは、ねずみが相反する2つの世界を統合する収斂点となっているために SQ III に送られているからである。

したがって玩具に関しては、SQ I の後半部はSQ III と対応している。この2つは、共に空間の規定で始まる (D)。SQ I ではそれに続いて、玩具の紹介 (E)、子供とその玩具の関係 (F)、子供どうしの交流 (の暗示) (G) が語られるのに対し、SQ II はこれと逆の順序 (G→F→E) によって展開されている。すなわち、表題にもなっている貧者の玩具の正体は、最後まで伏せられており、そのサスペンスの効果が読者の好奇心をつなぎとめ、最後の驚きを準備している。

	SQ I (後半)		SQ III
D	A côté de lui,	D	A travers ces barreaux symboliques séparant deux mondes, la grande route et le château,
E	gisait sur l'herbe un joujou splendide, aussi frais que son maître, verni, doré, vêtu d'une robe pourpre, et couvert de plumets et de verroteries.	G	l'enfant pauvre montrait à l'enfant riche son propre joujou, que celui-ci examinait avidement comme un objet rare et inconnu.
F	Mais l'enfant ne s'occupait pas de son joujou préféré,	F	Or, ce joujou que le petit souillon agaçait agitait et secouait dans une boîte grillée,
G	et voici ce qu'il regardait:	E	c'était un rat vivant! Les parents, par économie sans doute, avaient tiré le joujou de la vie elle-même.
		H	Et les deux enfants se riaient l'un à l'autre fraternellement, avec des dents d'une égale blancheur.

人形とねずみ

金持の子供の玩具は、豪華な人形である。それを描写している SQI (E) の記述は、その所有者の描写 SQI (B) と同一構造をもっていることを、まず指摘しておきたいと思う。

SQI (B): ¹⁾se tenait/²⁾un enfant/³⁾beau/⁴⁾et frais, /⁵⁾habillé de ces vêtements de campagne si pleins de coquetterie.

SQI (E): ¹⁾gisait sur l'herbe/²⁾un joujou/³⁾splendide, /⁴⁾aussi frais que son maître, /⁵⁾verni, doré, vêtu d'une robe pourpre, et couvert de plumets et de verroteries.

「その持主と同じようにみずみずしい」という表現によって、子供と玩具は明らかに照応しているが、文の要素の配列を見ると、2つの部分はどちらも、1) 状態を表わす動詞、2) 主語、3) ~ 5) 付加形容詞という順序になっている。そして故意か偶然か、最後の単語 (coquetterie—verroteries) は、互いに韻を踏んでいる。5)の部分においては、付加形容詞がすべて動詞の過去分詞形にそろえられていることが指摘できる。この統一が意識的であることは、ボードレールがエッセイの《avec une belle robe》を、《vêtu d'une robe pourpre》に訂正している (ヴァリエント g) ことから明らかである。また緋色 pourpre が、富や権力や高貴さを象徴する色であることは言うまでもない。

人工的、表面的な装飾物で飾り立てられた人形に対して、貧者の玩具は生きたねずみである。人形が意味と文体の両面でその所有者に似ることによって、裕福な人間を象徴しているのと同様に、ねずみは貧者を象徴する。この繁殖力の強い動物は、地球上の至る所に分布しているのである。あざみやいらくさといった植物の持っている特性が、ここにもまた見受けられる。

それでは、玩具そのものとしてみた人形とねずみについて考えてみよう。ねずみが「生きている」vivant のに対し、人形は、草の上に「じっと横たわって」いる。この動詞 gésir は、「埋葬されている」という意味を含んでいる。ねずみの「動き」が、生の世界に息づいているのと対比的に、人形の「不動性」はほとんど「死」に近づいている。ところでこの作品の前半部において、話者は未知の貧しい子供たちに進呈すべき安物の玩具として、次のようなものをあげていた。「たった1本の糸で動かされる扁平な道化人形」、
「鉄床をたたく鍛冶屋」、そして「尻尾が笛になっている馬に乗った騎士」である。これらに共通する特徴は、何よりもまず、その「可動性」ではないだろうか。ここに、子供の興味をひきつける玩具の、重要な特性が浮かびあがってくる。

猫とねずみ

ねずみが究極の玩具として登場するこの散文詩には、実は猫も姿を現わしている。同じく作品の前半部で、話者は、玩具を差し出された貧民の子供たちについて、次のように語

っていた。

「最初のうち彼らは手を出そうとはしない、自分たちの幸福を疑うだろう。それから彼らの手がさっと贈物をひつつかみ彼らは逃げ出していこう。人間に不信を抱くことを覚えたために、諸君が与えた食べ物を遠くへ行って食べる猫と同じように。」この直喩においては、子供が猫に比較されると同時に、玩具の方は、猫の餌食に喩えられている。

comparé : les enfants pauvres : le joujou
comparant : les chats : le morceau (=le rat?)

貧者の玩具としてねずみが登場することは、すでにここで暗示されているのだ。

ねずみは猫の戯れの相手であると同時に、その犠牲者でもある。玩具もまた子供に対して同様の立場にあると言える。貧民の子供はねずみを、「格子のはまった箱の中で、いじめたり、ふりまわしたり、ゆさぶったり」しているのである。ボードレールは『玩具のモラル』の中で、すでに子供の玩具に対するサディックな態度を観察していた。それは「魂を見たい」という欲求なのか、それとも、専制君主としての子供がもつ破壊本能であるのかもしれない。《puzzling question》である。

ねずみの意味するもの

金持の子供は、自分の美しい玩具には見向きもせず、ねずみを一心に見つめている。同じ対象への興味が2人の子供を結びつける。そして散文詩には、エッセイには見られなかった結論部がつけ加えられている。

「そして2人の子供は、平等の(égale) 白さをもつ歯を見せながら、互いに友愛をこめて(fraternellement) 笑いあっていた。」

笑いの中に、富者と貧者のこれまでの対立はすべて解消する。しかしここで2人の子供が「歯」を見せて笑うことは、きわめて意味深長ではないだろうか。歯とはとりわけ攻撃の器官である。友愛の笑いは、またサディックな笑いでもある。

ところで égale をイタリックにしたのは、ボードレールである。この語と fraternelle-ment の語は、フランス革命以来の標語、「自由・平等・博愛」を想起させるに十分である。しかしこの結論部において、彼はただ単に博愛主義的な平等をうたっているのだろうか。

ボードレールは「平等」について、ある意味ではきわめて過激な、独自の見解をもっていった。それは散文詩『貧乏人を殴り倒そう』の中によく表われている。

「他人と平等であることを証明する者だけが他人と平等であり、自由を獲得する術を知る者のみが自由に値いするのである。」¹²⁾

彼が考えていたのは、単なる社会的、経済的な平等ではない。殴られた乞食が「私」を殴

ボードレールの散文詩『貧者の玩具』について

り返したように、互いに人間として同じ価値を示す力をもつ者だけが、平等であり得るのである。

貧民の子供は、悲惨な生活の中からこの上ない玩具を見つけ出す。そして金持の子供の方もまた、その玩具のすばらしさを、子供としての直観で正当に評価する。こうした関係においてはじめて、両者の「平等」は成立しているのである。

ところで、この2人の子供の直観は、芸術家としての感受性を示してはいないだろうか。この論の最初に言及した『現代生活の画家』にあるように、芸術家の出発点は、その好奇心にある。金持の子供は、ねずみを「まるで未知の珍しいもののように、熱心に見つめて」いる。玩具が子供にとって、想像力を自由に飛翔させるためのものであるならば、生活 *vie* の提供するねずみという玩具は、とりわけ現実世界の生み出しうる芸術の出発点を予感させはしないだろうか。コンスタンタン・ギースやボードレールがあくことなく追求し涉猟した現実の中の芸術を、この1匹のねずみに読み取ることは、決して不可能ではない。

註

ボードレールのテキストとしては、Charles BAUDELAIRE, *Oeuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, 2 vol., Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1975 を用いた。これは註において、*Pl I*, *Pl II* と略記する。

- (1) *Pl I*, p. 582.
- (2) Cf. *Pl II*, pp. 358—360. 素朴さの美学については、阿部良雄氏の《Baudelaire face aux artistes de son temps》, in *Revue de l'art*, n°4, 1968 ; 邦訳, 「素朴さの美学——ボードレールと同時代の芸術家たち」, 『絵画が偉大であった時代』所収, に詳しい研究がある。
- (3) *Pl II*, p. 578.
- (4) *Pl I*, p. 582.
- (5) *Idid.*, p. 583.
- (6) *Pl II*, p. 690.
- (7) Cf. Emile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, t. I, chapitre XIX, 《Les relations de temps dans le verbe français》, Gallimard, 1966, pp. 237—250.
- (8) *Petit Robert*
- (9) *Grand Larousse de la langue française*
- (10) *Trésor de la langue française*
- (11) *Pl I*, p. 703.
- (12) *Ibid.*, p. 358.